

室戸沖南海トラフ陸側斜面の土佐簪海盆より得られた完新世タービダイト

Holocene turbidites from the Tosabae Trough, a landward slope basin of Nankai Trough off Muroto

岩井 雅夫[1]

Masao Iwai[1]

[1] 高知大・理

[1] Kochi Univ.

度重なる南海地震により形成された地震性タービダイトを検出し、その繰り返し特性を調べる目的で、室戸沖南海トラフ陸側斜面に位置する土佐簪海盆より採取されたピストンコア KR9701P1 および近隣の KR9701P1 について解析を行った。KR9701P1 からは総計 31 枚のタービダイトが、KR9911P1 では 27 枚の砂層が検出された。土佐簪海盆は河川につながる海底谷とはいっさい隔絶されていることなどの状況から、タービダイトは巨大地震発生時の強振動により周辺斜面で発生した混濁流により形成されたものである可能性が最も高い。KR9701P1 の 7 層準 11 試料から選別した浮遊性有孔虫化石について AMS14C 年代測定を施した結果、最上部は試料採取時に相当量損失しているものの、AD 約 1600 年以前については、7150calBP までさかのぼるタービダイト形成史を記録していることが明らかになった。堆積速度曲線は 2 本の直線に回帰でき、半遠洋性泥の堆積速度は 75cmrd 以浅で 109cm/ky、以深では 47cm/ky である。この回帰直線により、各タービダイト形成年代を算出したところ、明応（1498 年）、正平（1361 年）、天福地震（1233 年）、康和（1099 年）などの歴史地震、10 世紀後半？や 3 世紀から紀元前 3 世紀の遺跡から推定されている南海地震に対比された。一方仁和地震（887 年）と天武地震（684 年）に対比されるタービダイトは検出されなかった。